

巻頭言

大学院入学の勧め：臨床的必要性を踏まえた精神医学研究
実施体制の構築へ

尾崎 紀夫

名古屋大学大学院医学系研究科 精神医学・親と子どもの心療学分野

我々、臨床医は、患者さんやご家族から「この様な研究をして欲しい」という思いをお聞きすることが度々ある。例えば、漸く、病状が落ち着き、正社員として就労することになった双極性障害の患者さんから、「何年間うつ病として治療されたが良くなり、苦しくて死にたいとまで思った期間を過ごしました。他の双極性障害患者がこの苦しさを経験することのないように、双極性障害の診断法を早く開発して下さい」と、言われた。また、未だに不安定な双極性障害患者さんの娘さんは、「母は、私を産んだ直後に発病して以来、再発を繰り返しています。私も同じ病気になるかと思うと出産できません」と、話されていた。

最初の患者さんは抗うつ薬と抗不安薬主体の治療を受け、混合状態と判断される時期は焦燥感が強く自殺企図もしていた。また、軽躁病相は多幸感がなく、不機嫌で易怒的であったため、「境界例」と前主治医にみなされ、関係性が極めて悪くなっていた時期もあった。受診時点のうつ病相を評価するだけではなく、ご本人とご家族から生活歴、病歴を聞く中で、過去の軽躁病相や混合状態を確認して、双極性障害の診断に至ることができた。過去のうつ病相の回数が多かったことから、双極性障害を念頭に置くべき症例であり、前医も生活歴、病歴を丁寧に聴取すれば、診断に至ったであろう。しかしながら、患者さんの期待に沿えるような補助診断の手立てがあれば、診断から適切な治療に至る期間はもっと短かったのではないかと思う。

二人目のご家族のご心配にお答えするには、①ご本人が出産した場合に、お母様と同様の双極性障害を発症する可能性を評価できること、②もし発症の可能性がある場合には、的確な発症予防策が提示できること、③何より、患者さんであるお母様の再発予防ができること、が必要である。しかし、未だに病相を繰り返し、頻回に入院を要する状態が続いており、ご家族の期待に答えることが出来ていない点は、申し訳ない限りで、研究の必要性を強く感じる。

かつて、多くの大学において、「学位取得は教授権力の強化に繋がる」、「研究と臨床の分断が生じる」といった「学位制度のもつ否定的側面」が指摘され、大学院入学および学位ボイコットに至った。とりわけ、複数の精神医学教室は、この様な事態が尾を引き、大学院入学者は誰もおらず、学位取得者もいないといった時代が長らく続いていた。

筆者は、1982年に医学部を卒業し、2年のローテート研修の後、学位ボイコットは漸く解消されていたが、「精神科医としての医療実践を10年以上積み重ねれば学位申請の資格はない」、加えて学位申請には学内外教室員の審査を受ける必要があり、大学院入学生は10年以上にわたり存在しない、という医局に入局した。6年間の精神科臨床経験を経る間、臨床と研究の二足の草鞋を履く生活をしてきたが、「研究と勉学に専念する期間を持ちたい」と願い、大学院入学とい

う選択がないことも一因として、留学を思い立った。1990年、米国National Institute of Mental Healthへ留学先を決めたが、博士号取得がFellowshipを提供する（有給ポストに就く）条件であったため生化学教室から学位申請をして留学した。

2000年前後から、漸く、この様な流れに終止符が打たれたと思っていたら、「学位より専門医（精神科の場合は指定医）」といった風潮が医学界全般に強くなり、精神医学研究を志すものは減少し、大学院に入学して研究する人口は回復しないまま、今に至っている。

気分障害、統合失調症、発達障害、摂食障害、認知症、いずれも頻度は高く、自殺、休務など、もたらす社会的損失は甚大である。「日々の臨床疑問の解決」とともに、「病因・病態を解明し、病因・病態に即した診断、治療・予防法の開発」を目指す研究の必要性は、日々に高まっている。

また、大学院に入る目的は、研究活動を通じて、文献の検索と批判的吟味、研究デザイン、データ解析、データプレゼンテーション、サイエンティフィックライティングといった研究遂行に必要な基本的ノウハウを身につけ、今後の研究活動の基礎を作るに留まることなく、臨床にも活かせる科学的視点を身につけることである。したがって、将来、どのような精神医学の途に進むにしろ、大学院教育を受けることは有意義である。

一方、本邦の精神医学研究体制は、以前に比べれば整備されつつあるが、一層急速に研究規模の拡大と質の向上を図っている欧米と比べると、後塵を拝しているとの印象を強くしている。その背景には、欧米の政府が、精神疾患の社会的損失を認識し、その対策として精神医療とともに精神医学研究に重きを置いているという事情も大きい。我が国も、精神医学研究の重要性が広く認識され、臨床データや画像データ等を含む多様な表現型とゲノム、死後脳データをサンプリングし、解析する研究体制の構築が必要である。

研究者の養成と研究体制の構築という両輪が揃うことが、真の研究推進には必須であることを、我々、教える立場、学会の役職に就いているものは十分自覚し、より良い研究体制を提供することを責務として、研究意欲のある人を出来るだけサポートしたいと考えている。

過去の「学位制度のもつ否定的側面」に関する反省は、十分踏まえると同時に、大学院に入学し、患者さんやご家族の切実な要望を適える診断、治療、予防法を見出す研究に参画して頂ける方々が、一人でも増えることを願っている。

当方の大学院に関しては、下記のweb siteをご参照下さい。
<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/seisin/graduateschool/index.html>